ロンリー

嶺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロンリー

【Ｎコード】
Ｎ４９５６Ｒ

【作者名】
嶺羅

【あらすじ】
どこか遠くへ逃げたくて、私はこの街を出た。私は現実を拒んだ。
――それでもあなたはやっぱり来るの。（基本灰原の一人称）長編の予定です。組織の話はあまり絡みないです。

Fast Lonely

どこか遠くへ行きたくて。

「心配しないで」

そう書き置きして、家を出た。
誰にも会わずに済むであろう早朝。

きっとあなたは私を探すの。

それが余計辛いことを・・・
あなたは知らないでしょう？

この土地を選んだのは、雪景色を見たかったから。
米花町から遥か遠く、ここまで来ているであろうとは誰も考えない

ような、山を越えたこの場所。
新幹線に揺られている時、景色が徐々に変わるのと一緒にこの汚い心も綺麗に変わればいいのに。
そう思った。

あのごちゃごちゃとした街並みはまるで今の私の心の様。
人がたくさんいて何をしでかすかも定かではないあの街。

それに対してここの景色は辺り一面真っ白で。
人気も無ければ車すら通らない、静かでのどかなこの風景は、私の望む最上級の心境。

新幹線を降りて、ただ行くあてもなくとぼとぼと歩いた。
ただひたすら続くであろうこの道を。
人気がなくひっそりとしたこの町を。
私は行くあてもなく歩き続けた。

ちらちらと雪が降る。
このくらい、東京でもたまに見る。

けれど、この辺一帯は今日まで生きてきた内で一度も見たことのないような雪景色で。
どれだけ降れば。どれだけ積もれば気が済むのと言わんばかりにそ

ここにある雪。

東京ではこんな景色、絶対に見れない。
最悪の異常気象にでもならなきゃこんな変化はありえない。
私はそんなこの景色を見ることも兼ねてこの土地へ訪れた。
”どうせどこかへ行くのなら”、あの薄暗い場所とは対した場所へ逃げたかった。

ふと、意味も無く立ち止まってみる。
一面白のこの場所に、ぽつんと一人小さな体で立たずむ私。
後ろを振り向けば、まっすぐとこちらに向かって伸びる小さな足跡。

空を見上げれば、広がる雲。
決して晴れとは言い難い今日の天気はまるで私の心そのもので。

哀しいはずなのに

涙は不思議と出てこない。

一人ぼっちなはずなのに

なぜか心細くはない。

お腹が空いて、ポケットに手を伸ばした。
飴と一緒に掴みだしたのは携帯。
着信は軽く３０件を超している。
こんなに着信があっても気づかない程、私は現実をシャットアウトしていたんだろうか。

博士。
吉田さん、
円谷くん、
小嶋くん。
蘭さん。

――――工藤くん。

一番多いのはやっぱり、あなた。
望んでいる半面、拒否していたあなたの存在。
あなたからの着信。

私は目をつむると、見なかったことにするかのようにして携帯を閉じた。

Ｆａｓｔ　Ｌｏｎｅｌｙ（後書き）

また新たにＦＦ小説の長編を書こうと思い、連載を始めてみました。
まだシナリオは整ってないですし、最後まで終われるかどうかもわからないです。
それでも、できる所までかければいいなと思い公開することにしました。

処女作のように長編がかければな、と思いますが今回は組織関連ではありません。
もし関連づいてたら似たような小説になるような気がします（笑）

それでは。
長々と失礼しましたｍ（＿＿）ｍ

Second Lonely

「灰原！！！！」

あぁ・・・そうしてあなたはまた、私を追いつめる。

携帯を握りしめて、この先足跡が続くであろう道を歩いた。
ポケットから取り出した飴の袋を開けて、ピンク色の飴を口の中に放り込んだ。

・・・甘ったるい。

ここがどこかなんて分からない。
不確かな知識と頭脳と、この小さな体で。

どこまで行けるかなんて、無謀だ。
ただ、あの現実から目をそむけたくてここに来た。
そうあの日――私が決意したのは2日前。
書き置きをして出てきたのは、今日の朝方。
朝一番の新幹線に乗って、着いたのは東北地方。
私が望んだ、一面真っ白で静かな町。
決意したのは2日前――さかのぼれば見える、辛い現実。
いや、2日前だけではない。もっと前だ。ずっと前から思ってたことだ。

どこかに消えることができたのなら。

甘い。
甘ったるい。
あの空気は、あの感情は、あの場所は。
私にとってはひどく甘い場所だ。

あの残酷で汚らわしい闇から這い出てきた、薄汚い私。
そんな私が、あんな優しい場所にいていい訳がない。

解毒剤を作ったのは私。

あの穏やかな空間を壊したのは、私。

全ては私の過ちで。

いくら組織に命令されたからと言って、やったのは私。拒絶して殺されれば、それまで。

辛いことも無かっただろうし――――姉の死を見届けずに済んだ。

いや・・・見届けることすらもままならなかった。

もう何もかもを捨てられた、あの時に死していれば。

今こうして辛い思いをせずに済んだのに。

重く辛い荷を背負わずに、

哀しい現実を見ずに、

いられたはずなのに。

私は・・・何か間違っていたんだろうか。

最初から間違っていたんだろうか。

そう・・・・・最初から。

私が生まれたことから既に。

歩きながら物思いに耽るのもそろそろ疲れた。
歩いてどのくらい経ったのだろう。
もうずっと歩いた気がしたのに、後ろを振り向けばまだ先に降りた駅が見える。

新幹線を降りて、とりあえず電車に揺られ、たどり着いた。
確か、駅名は”宮外駅”。
もう帰ることも無いはずなのに覚えたそれは、脳の奥底にしまっておくことにした。

さっきまで口の中にあった飴はもうない。
あぁ、本当に疲れた。
この人気のない道でも、ベンチはあるらしい。
私はそこに横たわった。

私が最後に見たもの。

楽しそうに笑う、今頃無害である筈の彼。
それを取り囲む、数人の子供たち。
そして・・・彼の想い人。

辛くて、苦しくて、虚しい。

最早どこにも居場所がない私。
今笑顔の彼等だって、私が原因で招いた涙も数知れず。

きっと私がいない所でも泣いていた。

私をかくまってくれていた、あの人も。
はっきり言って、何を考えているかそうわかったもんじゃない。

どうして私をここに置くのか。
確かな利益も義理もないのに。

気がつけば目の前は真っ暗闇だ。

Second Lonely（後書き）

まだこの時点では、
謎ありすぎです（笑）こんばんは。
まだまだですね。うん、まだまだ。
文章力無さ過ぎです。
これから灰原がどうなるのか・・・
見届けていただきたいです。

そういえば私、今日実力テストでした（笑）
やばいやばい。
昨日勉強してないし。
落ちたな～わらわら。ぇ、
てことで、切り替えます。
遊びます。サイトにも足を運びます。

観覧ありがとうございました。

Third Lonely

消えられたらいいのに。
忘れられたらいいのに。

「だからさーなんで付け込んでくんだよ！！」

・・・なんて言えたら、すっきりするのかしら。

自分で自分にクスっと笑った。
全部、自分の中で起こっていることに過ぎないんだけれど。
そう考えてみると虚しい。

――どうやら私は眠っていたらしい。

さっきまでちらちらと降っていた雪はいつの間にか止んでいる。

・・・まだ眠気が覚めないのか。
どこからともなく、あの声が聞こえる。
今いちばん、聞きたくない声が。
私・・・とうとう頭がおかしくなった？
それとも、幻聴となって現れるくらいあの人にゾッコンなのか。

「・・・っ灰原ぁ！！！！」

望まなくても。
あなたはやっぱり来てしまうんでしょう。

「・・・どうしてよぉ」

さっきまで流れなかった涙が、どうしてこのタイミングで流れ出るの。
ずるい。

あなたは本当にずるいんだ。

――――――・・・

「馬鹿やろー！なにやってたんだ！」

「・・・」

「黙ってたってなにも・・・」

「まぁまぁ新一・・・」

「博士は黙ってろ！！」

博士は悪くないのに怒鳴る彼にムっとした。

「おい灰原、なんとか応えろよ！」

あたしはさっきからうるさい彼に、ただひたすらシカトをかまして

やっている。
なんだか眠い。
今は博士の温かい車の中だからか。
泣いたからなのか。
眠気が私を襲う・・・が、

「ったく・・・泣くならどっか行ってんじゃねーよ！探したんだぞ！」

隣でぎゃんぎゃん罵声を飛ばす彼のせいで眠気が引いてゆく。

「・・・泣かないならどこかに行ってもいいって？」

「んな・・・」

「なら泣かなきゃよかったわ」

「あのなあ・・・！」

わかってる。
彼は、心配してるんだって。
わかってるわよそのくらい。
私をなめてるの？

これでも、あなたよりは上なのよ。
・・・多分ね。

「お前さあ、何で逃げた？しかもこんな・・・こんな遠く離れた場所まで」

「ここの景色が見たかったのよ」

「ここまできて嘘ついてんじゃねーよ」

「あなたこそ、あの置き手紙だけでどうしてそうここまで私が”逃げた”と確信してるの？」

「・・・っ」

言葉を詰まらせる彼。
何も言えなくなって縮こまる彼にため息をついて外の景色を見た。

景色が・・・振り出しに戻ってゆく。
来る時より、遥かに長いこの道のり。

「おい・・・灰原。お前本当にどうゆうつもりだよ」

「何が？」

「・・・みんなに迷惑かけて・・・心配かけてもまだっ・・・」

「私、頼んでない」

「・・・はっ？！」

「心配してなんて言った？逆よ。わたし、しないでって」

「・・・っ勝手にしろ！」

えぇ。

勝手にする。

私はあなたたちから逃げるの。

・・・だからホラ、早く降ろして。

「哀くん」

狭い車の中に、あの人の声が響く。

低く、冷静な声。

どうしてこの人の声はこうも落ち着いているんだろうか。

「哀くんがいなくて困るのは、」

「・・・」

「わしじゃよ」

たったそれだけ。

その一言。

彼からの罵声とは違う。

低く、落ち着いた、大人な声。

”愛してる”と、”恋してる”は、

こんなにも違うなんて。

Four Lonely

気づけば右の頬に何かの感触。

目尻から落ちてくるそれは、頬を伝って地面にパタリと落ちた。

儚く。

消えたそれは。

再生不能の、まるで私そのもの。

「・・・はいば・・・」

「・・・博士、」

「・・・なんだい？」

「私・・・博士が好き」

「・・・この歳で告われるとは・・・」

「工藤くん・・・工藤くんも、好き」

「・・・俺、」

「でもごめんなさい」

「・・・え、今俺ら、告られてフラれた？」

博士には、愛を。
工藤くんには、恋を。

どちらの苦しみも、苦しいことに変わりはないけれど、痛みは感じ方によって違うらしい。

そして博士の愛は、どうやら包容力が大きいらしい。

きっと。
博士に冷められたら、私は行き場を無くしてしまうだろう。
今帰る場所はあそこだけ。

工藤くんに冷められたら、ある程度状況は理解できてるだろうから、悲しいけれどそれなりに現実を受け止めるんだろう。
彼女があることを知っているから。

きっと苦しむけれど。

これが、恋と愛との違い？

私は博士を愛しているけれど、きっと工藤くんのことは愛してない。

そう――これが愛ならば、私は完全に立場を失う。

ここにいることも儘ならない。

私は部外者で、犯罪者で。

愛してはいけないんだから。

だから、いくら工藤くんを愛していても・・・恋で止めるべきだ。

いや、恋すらも罪かもしれない。

だって、彼には彼女がいる。

これはタブー。

愛も恋も、捨てなきゃいけない。

――じゃあ、そしたら

私には、

何が残るんだろう・・・。

気づけばボロボロと、雫は頬を伝う。

「灰原・・・」

「辛い」

「・・・」

「・・・なにが、」

何がお前を苦しめる。

何もわかってないんだから。

だからあなたは・・・私を苦しめてんのよ。

私を苦しめてるのは・・・あなたよ。

博士の言いぶりはまるで、私の全てを見透かしているようだった。
余計なことを言わず、ただ一言だけ私に言う博士は本当に読めない。
だけど助かる。

彼の言葉は、軽いようで重い。

工藤くんは・・・どうして。
どうしてそこまでするの。

どうやってあそこから私を見つけた？

そう聞けばきっと、
「探偵だから」
という理屈で片づけてしまうんだろう。

「・・・はいば、」

「・・・」

「・・・寝てやがる、こいつ」

「疲れたんじゃろ。寝かせておきなさい」

「ったく・・・しょーもねえやつ」

普通だったら。
いや、良心があっても。
こんな私に、自分の羽織をかけたりはしないんだろう。
でも工藤くんは、丁寧に私に自分のジャンパーをかけた。

本当は寝てなんかない。
意識があるから。

あなたの優しさが沁みて――――辛かったんだ。

こんな汚い私を。
そんなに優しくするのはなぜ？
自意識過剰？
当てはまるならそれが正しいだろう。

でも、そう思うのは
彼が優し過ぎるから。

期待するからやめてよ。
彼女が・・・いるなら。

居場所のない私を、居場所のないまま楽にさせて。

Five Lonely

「――・・・いちゃん」

「・・・」

「・・・哀ちゃん？」

「――あ・・・」

「よかったあ、目が覚めて」

次に目が覚めた時、そこは見覚えのある風景が広がってた。
白い天井・・・その前には、蘭さんの顔。
あぁ、また戻ってきてしまったのね。
確信は苦しみへと変わる。

「哀くん、もうちょっと寝てなさい」

起き上がろうとする私の肩を押す博士。
私はその博士の手を払いのけた。

「哀くん・・・」

「コナンくーん、哀ちゃんが・・・」

「やめて。呼ばないで」

「え・・・」

工藤くんを呼ぼうとする彼女を止めて、俯いたまま起き上がる。
蘭さんと博士は心配そうに私を見た。
二人の気持ちは痛い。
温かくて、優しくて。まるで傷を癒すかのように放つそのぬくもりは、逆に私の傷をえぐる。
私はそんな二人が大嫌いだ。

「・・・哀ちゃ、」

「私が出て行った意味、わかってるんでしょ？」

「・・・？」

「放っておけばいいでしょ、こんなやつ」
「・・・」
「いてもいなくても、変わりない」
「・・・どうして、」
「解毒剤を作れば満足？」
「・・・どうして、そんなこと言うの？」
「私が必要とでも言うの？」
「そうだよ！！」

蘭さんは、私をじっと見てそう叫んだ。
何も知らないあなたに――何がわかるって言うの。
あなたの愛する人も平和も、全て奪ったのは私なのに。

「哀ちゃん・・・あなたは、」
「解毒剤なら、引き出しに」
「・・・哀くん」

博士が私を呼ぶ、低くて落ち着いた声は変わらない。
いくらどんな状況であろうと、この人の声はいつだって私を捉えた。
私は冷たい眼差しで彼を見上げると、彼は今までにないくらい真剣な顔で私を見つめてた。
何を言うわけでもなく、ただじっと。

「――――言うなってでしょ？」

「・・・」

「・・・ははは っ笑わせてくれる・・・ハハハ」

「哀、ちゃん・・・？」

全然笑えない。
むしろ虚し過ぎて何もない。
でもただ笑いがこみ上げる。
何も楽しいことなんてないのに。
私のことが人が変ったように見えたのか、蘭さんは私のことを驚いたような顔で見つめる。
博士の顔は曇ってきてる。

しんとした空気の中で一人部屋中に響く位の声で笑う私の目尻からは、また望みもしないような感触が頬を伝った。
それに気づいたころには私も黙って、俯いて。
俯いたことによって毛布の上に落ちるそれを、私はただじっと見つめてた。
しゃくり上げるわけでもないのにただ静かに落ちるそれを、私は見つめてた。

いらない。

もう涙も気持ちも、全ていらない。

居場所もココロも何もかも、私にはもう不必要。

どうか。
どうか楽に。

「死にたきゃ勝手に死ねばいい」

「・・・くど、」

「だけどなぁ、人様に迷惑かけてんじゃねーよ」

「・・・だからよ」

「あぁ？」

「だからこの場からいなくなるんじゃない。人様に迷惑かけたから！」

いつの間にかドアに寄りかかってる小さな彼にそう叫んだ。
毛布を握りしめている私の手は、心なしか震えている。

「哀ちゃん・・・？」

「哀くん」

「・・・灰原」

「もうやめて！！わたしは違う！！」

私は。

宮野志保で、灰原哀ではない。

みんなに優しくて、クールで小学一年生にしてはちょっと大人びている、あなたたちに映るビジョンの女じゃないのよ。

お姉ちゃんが殺されなければ、あのまま組織にいた醜い女。

それが私なの。

Five Lonely（後書き）

なんか書きたいことが
ごちゃごちゃ（笑）
まとまり無いけど次話から
回想？とかに入る予定です。

ーーーーー

昨日の地震、大丈夫でしたか（；｜；）
かなリびっくリしましたw
掃除早く終わってぐだーって
してたら揺れてきてwww
震度5弱？くらいでした。
初めてでびびった（T｜T）
もう大丈夫です。
みなさんも気をつけて・・。

Six Lonely

「・・・哀ちゃん」

「呼ばないで。その名前で呼ばないで！！」

何があたしを苦しめるかって。

この場所全てがそうなんだと思った。

もちろん、この私の”今の”名も、その理由の一つだと、わたしはそう思った。

「・・・蘭くん。少し、この場を離れてはもらえないじゃろうか。コナンくんも・・・二人っきりに、してほしい」

「・・・わかった」

博士は蘭さんとドアにおっかかっている工藤くんにそう言った。

二人は、それに応えて部屋を出る。

「・・・哀くん」

「・・・だから呼ばないでって「でも哀くんは哀くんじゃ」

「・・・・」

「・・・それとも、志保の方が満足かね？」

「・・・・」

「わしが思うのは、哀くんがこの場所をどうして嫌に思うかが不思議なことじゃ。どうしてそこまでこの場所を嫌う？」

「・・・苦しいのよ。なにもかも、私には」

「何が苦しめてる？」

「・・・博士には、わからない」

この平和で穏やかで和やかで優しいこの場所に、昔から必要不可欠だったあなたには、私の気持ちなんて一生わからない。

解り合えない。

解り合えたら、どんなに楽なんだろうって思うの。

私が”ここの場所”に合う人間ならって。

「哀くん。わしは、哀くんがいてくれてとっても助かってる。それではだめなのかね？」

「・・・誰が必要とか、そんなんじゃないのよ」

もうそんな問題じゃない。
私がここにいることで、私には罪悪感と後ろめたさしか残らない。
澄ました顔して、何も感じずにあの場に居ろっていう方がおかしいのよ。

だから胸がはち切れそうで苦しくて、この場から離れたいと、思うわけで。
誰かが、とか、そんな問題じゃないの。
私の心が苦しいのよ。必要性なんかじゃ揺るがない。

それに、誰かの居場所を失ってまでしても、この場所に居たいとは思えない。
少しは人間の心が残ってるのか。

けれど、邪心は消えたわけじゃない。

いくら。
いくらこの場所には居られないとは思ったって、少しの邪心は残るもので。
ずるい自分の心がたまに押し寄せる。
そんな自分がたまらなく嫌になる。

過去は消せるわけなんてない。
誰が「過去は過去」と言ったって、私の中の過去は見ぬフリなどできない。

組織と関わった事実。
姉の存在が消えた事実。
そして、
彼を”愛してしまった”という事実を過去にする勇気なんてものはない。

「・・・も、もう・・・」
「・・・」
「苦しいの・・・・・」
解放して。
この暗闇から。
「・・・哀くんの泣き顔を初めて見たのは、あの時じゃったのう・・

・」

何を。

何を思って博士はこんなことを言うんだろうか。

「哀くんがあの時、大泣きしたのは・・・明美さんを思って泣けたんじゃろう？」

「・・・」

確かに違うとは言えない。

あの時、つまりは工藤くんと私が初めて帝丹小で顔を合わせたあの日、工藤くんに叫んで大泣きしたのはお姉ちゃんが助かったかもしれない。お姉ちゃんが死なずに済んだかもしれないと工藤くんのせいにしてお姉ちゃんを想って流した涙だった。

今考えれば、お姉ちゃんは組織の奴等のせいで死んだのであって、工藤くんのせいじゃない。馬鹿みたいだけど、その時は気が動転していたらしい。

本当、馬鹿みたいだ。

昔も、いまも。私は。

「・・・誰かを想って涙を流せるなら、哀くんの心はとっても綺麗じゃな」

何を。

何を思って博士が私にそう話したかは、わからない。

博士はそれだけを言うと、私を残して部屋を出た。

Six Lonely（後書き）

大分更新空きました（＜＿＞）
読者様、アクセスしてくださった方、
すみません（汗）

今回の話は、灰原の過去の話が
いまいち思い出せず
資料探しをしました。
（漫画本探しw）
しかし見つからない（。Д。;）
結局は見つかったんですが。

一応話は原作とリンクしてるので
原作がわからないといまいち
想像できない部分があるかも
しれないです。（今回とか）

それでは、次回の更新も
よろしくおねがいします。
最後に、目を通してくださった
皆様、ありがとうございました。

Seven Lonely

博士が出でいった後の部屋はやけに静けさが目立った。一人のただっ広い空間に、ぽつんとベッドに座る、私。

博士が出ていったドアを私はただじっと見つめた。

・・・博士。

博士が優しいことは知ってる。博士が私を思って言ってくれたことは知っている。だけどそれを綺麗なまま心にとどめておく自信など、今の私にはない。

博士がくれた言葉を綺麗にとっておく自信など、

私には、ない。

＞コナンｓｉｄｅ

前からそうだった。

というより、出会ったときからあいつはそうだった。

いつも自分は一人で、誰からも深入りされたくない・・・といった感じ。俺たちとは決して深い関係にはなろうとはしない。
いくら仲が良くなっても、信頼し合うようになっても、俺にはあいつの中にはどこかにぽっかりと一人の空間が空いているように見える。

そんなに俺たちを信用しきれていないのか、となればそういう訳でもないらしく、多分あいつは責任を感じているように思う。

俺が”こんな姿”になったこと。
そのせいで蘭の傍に新一として居られなくなったこと。

灰原はそれを気にしている。
そしてなにより、自分が組織から来たことを気にしているみたいだった。

自分では言わないけれど、あいつが悩んでいることは多分そのことだ。

同情しているわけじゃないけど、俺があいつの立場だったらきっと同じことを考えた。
自分のせいで周りを変えてしまった。自分のせいで人様の人生を変えてしまったって、ずっと悩んで苦しんで自分を責めると思う。

灰原は多分、今そんな状況だ。

他があるとは思えない。家出までして、俺たちから離れたかったわけなんて、あいつに考えられるのはそれしか思いつかない。

気分転換にしては不自然で、いたずらにしてはやり過ぎている。

「呼ばないで」

今まであいつが名前を拒んだことはなかった。
今まであいつが博士を拒んだことはなかった。

あいつが――あいつが、今までで一番恐ろしく・・・悲しそうに、辛そうに見えたのは、もしかしたら今日なのかもしれない。

Seven Lonely（後書き）

2ヶ月放置すみませんm（_ _）m
かなり放置しました。

内容まとまらない！
ごちゃごちゃだ！
すみませんm（_ _）m

かき方変えてみました。
（改行風・・・なの
やってみました。）
なんか見てて改行ないなー
やってみようかー

ってことでしてみました。
気に入ったら続けます。

ーーーーーーー

処女作アクセス
ありがとうございます！

この場を借りてお礼。
ありがとうございます！

未だにアクセス数途切れないのは
普通なんでしょうか
凄いのでしょうか

とりあえずありがとうございます！

でわ！

Eight Lonely

私が家出をして、一週間が経った。
みんなで話し合ったのかなんなのかは知らないけれど、”あの日”以来、誰も”あの日”のことを口に出すものはいなくなった。
気を使ってるのかもしれない。

あたしはこの一週間、ずっと寝室にこもったままだった。研究室に何日もこもったことはあるから、寝室にこもっていることはどうってことはなかった。
ご飯はいらないと言っているのに、それでもご飯を朝昼晩届けに来る博士に参った私は、ほんの少しずつだけれど食べることにした。本当は餓死でもしようと思ったけれど、私の残飯を見るたびに悲しそうな顔をする博士を見ていると、そんなことはできないと思ってしまう。

博士は、私ご飯を食べると、とても嬉しそうな顔をして喜んだ。私が博士に何かしてるわけではない。むしろ、迷惑しか掛けていない。それなのに、博士は喜ぶんだ。

時々、蘭さんもご飯を運んでくれる。私はその時、決まってタヌキ寝入りをする。そうすれば、話しかけられることもないと思ったから。だけど彼女は、私がわざと寝た振りをしていることに気づいているのか、

「…哀ちゃん。ご飯、ここに置いていくね」

そう言って部屋をあとにする。その時、私は彼女に返事をすることは無い。

彼女はたまにご飯を持ってくると、必ずすることがあった。

部屋を出る前に、必ず”引き出し”を見て部屋を出る。

――彼女は、”あの日”私が言った言葉を気にしている。私が”あの日”言った言葉を。

『解毒剤を作れば満足？』

『解毒剤なら、引き出しに』

その言葉は彼女にとってはまだ謎のままなはずで、その謎は未だ解かれていないのだ。あの時博士が私を止めたから、その話はお蔵入り。彼女は真相を知らないままでいる。

私は自分で言ったことにも関わらず、そんなことを言ったことは忘れていた。けれど、彼女が引き出しを見つめては帰っていくその姿を見て、思い出した。

彼女はそのうち、誘惑に負けてあの引き出しを開けてしまうだろう。

私がタヌキ寝入りをしているのではなく、本当に眠っている。そう彼女が思っていたのなら、なおさら。

そしてもう一つ。彼女にとっては気がかりであろうことがある。

――「哀ちゃん」

彼女はそう私の名前を呼ぶ時、毎回戸惑う。

『もうやめて！！わたしは違う！！』原因は、私がそう叫んだから。

彼女は神経質になっている。そんなところまで覚えている彼女は、本当に探偵さんの彼女なんだな、なんて皮肉たっぷりにも思ってしまうんだ。

きっとそのうち彼女は知りそうだ。私が真相を伝えなくとも、彼女はどこかで情報を得て、全てを知ってしまいそうだからちょっと恐ろしい。

今の時刻はおよそ午後七時。

彼女が置いていってくれたご飯に手をつける。

「…おいしい」

これはきっと、彼女が作ったもの。博士の作るものとは、味つけが違った。

私は、いつも彼女が持ってきたご飯を食べるときだけは、目に涙を溜めながら食べる。

「…どうして…」

彼女にだって、家に帰ったらやるべきことがある。家事をして、勉強もして。それなのに、たまにこうしてこの家に来ては、博士の代わりに私のご飯を作って、部屋に持って来るんだ。

私なんかの為に、そうやって手間をかける。彼女にもきっと他にやるべきことがあるのに。
それなのに、このご飯だってわざわざ私の分を作ったりして。
「ばっかみたい…ッ」
そんなことを考えて、毎回涙を流しながら彼女の作ったご飯を口にする。

Eight Lonely（後書き）

5ヶ月も更新が空いた…。
前話を読んでくださった方、
（いないと思うけど）更新を
待っていてくれた方、
申し訳ないですm（__）m

また次話も空くかも…。

一昨日体育祭ありました！
わたしはですね、応援団長
やってましたww
ちょー楽しかったです！！
結果はぼろくそでしたがww
それでもやってよかったなと
思えました（＊^ー^＊）

受験もこんな感じでやれたら
いいんだろうけど…（笑）
全く達成感ないです。勉強に
関しては…。
受験生なんで、もっと本気になって
頑張らなきゃって頭の中では
思うんですけど、どうも行動
にはできませんね、はい。

頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4956r/

ロンリー

2011年10月10日15時44分発行